

私心の小人、無私の大人

上 廣 榮 治

春の大会は種まき、秋の大会は収穫。私たちはどこかにそんな思いを抱きつつ、日々の実践に邁進しております。皆様のこの二十一世紀最初の年の秋に刈り取られた稔りはいかがでありましたでしょうか。さぞかし大きな実をあげ、一回りも二回りも人間を大きくされたのではないかと期待しております。

そんなことを思いながら、「大きな人間」とは、どんな人を指すのか、考えてみました。

中国語にも「大人」という言葉があり、中国語の辞典には「大人為大事」などの例文が出ていますから、何事か大きなこと、大切なことを「成し遂げるであろう」と思われる人のことでしょうか。

また、英語の大人は「グレート・マン」ですが、これは具体的に有能な人、すでに成果を上げている人を指し、中国語の「大人」が何となく大きなことをしそうな人物を指すのとは少しニュアンスに違いがあります。では、日本の「大人物」はどうかというと、これはさらに漠然としてきます。

大正時代に、ある外務大臣の私的な宴席で明治の人物論が出たという挿話を、司馬遼太郎さんが小説『坂の上の雲』のなかで書いています。「人間が大きいという点では大山巖だろう」とある人が言うのと、

いや西郷従道のほうが大山よりも五倍は大きかったと別の人が言い、みんなが納得したというのです。ところがその席に西郷隆盛を知っていた人がいて、その従道でも隆盛に比べると月の前の星だと言ったものですから、一座の誰もが隆盛の「大きさ」を思つて呆然としたという話です。

ところが、ここで「大きな人間」として話題になった三人については、「有能」だったという評価はほとんどありません。無能、おとぼけ、得体が知れない、大愚の人という評価なら山ほどあります。つまり、英語の「グレート」とは呼べない人ばかりなのです。例えば、早稲田大学を創った大隈重信は、西郷隆盛をよほどの愚物だと見ていましたし、大山巖は自ら「私は何も知らない人間です。何も知らないから、どんなポストにも座れる」と語っていたといひます。西郷従道は何をし何をしなかつたのかも定かでない、毀誉褒貶すらありません。それほど摺み所がなかつたのでしよう。

日本語の「大きな人間」とは、どうやら賢愚の別さえわからない、茫洋として摺み所がない人、しかし圧倒的な存在感のある人のことを言うのではないかと思われまふ。それは多分、その人の下でなら思いつき能力が振ると予想させる人であり、より善い方向への努力であれば、とめどなくこれを許して、私心に根ざした介在を一切しない存在なのでしょう。

こうした意味での「大きな人間」というものが、もし本当にこの世に存在するならば、彼は（あるいは彼女は）「大自然の摂理」に最も近い人物ではないかと私は思うのであります。

自然の摂理のままに生きている人には私心というものが希薄です。私心がないから、自己主張をしたり、人を非難したりもいたしません。私について語らないがゆえに、その賢愚は定かではありません。世間の人からすれば、何を考へているのか捉え所がないということになります。

およそ人の世は水の流れる如く、雲の行く如く、自然の摂理のままにあるべき方向に向かつていくの

だと知っていますから、たとえ逆流が起こっても、その流れに乗ることはいたしません。

しかし、あるべき方向への動き、より善い方向への流れを加速させることには、大いに協力するでしょう。自然の摂理がそうであるように、彼は生きとし生けるものの仕合わせを願っているからです。

自然の摂理のままに生きる人は悩むことも迷うこともありません。何事であれ倫理に照らして正しきを行ない、外れたるを行なわないだけです。迷いも悩みもせず、ただ黙々と正しきを誠実に行なうだけです。

彼は希望を失うことはありません。さまざまな逆境があるにしても、いつかは自然の摂理のままに善い方向に向かうことを知っているからです。彼は日々に仕合わせです。倫理に従って誠実に努力することが、人間にとつての最も大きな仕合わせであると悟っているのです。

彼は、もちろん、世の毀誉褒貶を気にしません。それは自然の摂理とはかかわりがないことだからです。彼はいかなる事象もあがままに、平静に受け入れます。我が田に水を引くこともありません。

と、このように自然の摂理のままにある大人物の日々を想像していると、どうやらそこへ至る道が見えてきます。たぶんそれは、「ハイ」の実践と現実大肯定の日常化なのだ、と私は思うのです。

とかく自分の能力を過信している人は、他人の説くところを容易に受け入れることができません。何事であれ、自分の存在を主張したくて仕方がないのです。だから、とりあえず人の意見に反対します。しかし、自然の摂理からこれを見れば、他に異をたてて論争することに、どれだけの意味があるのでしょうか。どちらの意見が正しかろうと、物事はなるようになり、なるようにしかならないのです。たとえ相手を議論で打ち負かしても、相手はますます頑かたくなになり、心の内に反感を募つらすだけです。

自然の摂理や倫理に照らして生きる人は、どんなに異なった意見であつても、「ハイ」と受けるに決

まっています。己の智恵を誇り、あるいは私心をもって異を唱えては、眞実を見失うからです。

この「ハイ」の実践は、私心の抑制にも実に効果的です。反発し憤り疑う私心を、「ハイ」と応ずることのできるのです。まず「ハイ」と受けて、十二分に相手の説くところを聞き、その内容が倫理に適ったものかどうか、不自然なところがどうかどうかをしっかりと検証して、納得できればその通りに行動し、倫理に適わぬ場合は断じて受け入れぬだけのことです。

私心の抑制とは、現実大肯定にとつて欠くことのできない要素です。なぜなら、私たちから現実大肯定を阻むものとは、私心に他ならないからであります。私心が心の目を曇らせるのです。

世に生起する事象があるがままに見る。実はそれは至難の業です。黒澤明監督の『羅生門』は、ある事件にかかわった人々がそれぞれにまったく異なった「事実」を見ていたという設定で、世界中から賞賛を浴びました。なるほど人間の眞実とはそうしたもののなのだ。ただ一つの事象から、それぞれの個人のな事情によつて、まるで異なった「体験」をするものなのだ。そう世界の人々が共感したのである。

事実があるがままに見ることが出来る人、それは私心のない人、個人的な事情に左右されない人、すなわち現実大肯定ができる人です。私心の強い人は、現実を現実のままに見ることができません。ある種の宗教や主義、立場や利得に囚われている人は、現実の眞の姿を見ることができないのです。そうした人が見て語る「事実」とは、眞実ではなく、その人にとつての事実でしかないのです。

皆様は、これまで倫理の実践に努めてこられました。とすれば、私心はかなり透明になり、その生活は自然の摂理に近づいているに違いありません。私心が小さくなれば、それだけ人を容れる幅は大きくなり、善いことを為す力も増してきます。すなわち、一回りも二回りも「大きな人間」になつておられるはずです。今後とも、ますます「大きな人間」になられますよう、ご精進に期待いたしております。